ただ一人の最強魔導士

とある異世界のへっぽこ勇者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ただ一人の最強魔導士

【Ｎコード】
Ｎ１０６９Ｓ

【作者名】
とある異世界のへっぽこ勇者

【あらすじ】
とある異世界に最強の魔導士がやってきた。
しかし、着いた国は最弱の国で…？

Step：1

彼は唯(ただ)一人の魔道士であり、最強である。
彼の名は”柊(ひいらぎ)”。
そしてここは異世界。何故彼がここへ来たかって？
――それは一か月前…
彼はチキュウという惑星(ほし)で生きていた。
しかし生命はいつか終わる…彼にもその時が来た。
だが早すぎたのだ。神は哀れに思い、少年に選択させた。
”異世界で暮らす”か、”天国で暮らすか”を。
彼は異世界と、それも即答した。

しかも彼はこの世界でただ一人、魔法を使える…いや、使いこなせる。
使える者もいたが、とても戦闘に生かすレベルでは無かった。
そして彼のいるここは、独立王国。
ここ以外の独立した国は帝国に潰され、ここのみだ。
宣戦布告をされたため国民全員を城へ招集した。
そして彼を見つけた。
王は彼をいわば”宮廷魔道士”のような位に就けた。
「頼むぞ、柊」
「ああ。」
彼は王にタメ口で話した。
「お前、処刑されるぞっ」
兵士が小さな声で彼に言った。
「はいはい」

その時だった。
「来ましたぁぁっ！敵です！攻めてきましたっ！！！！」

城が崩れるほどの大声で、兵士が入ってきた。

Ｓｔｅｐ：１（後書き）

こちらは５００文字目標で進めます。更新は気が向いたときにします。

よろしくお願いします。

Step：2

「なにっ！」
「心配しないでください、俺が片付けます」
そう言って出てきたのは国内最強の戦士、”椿（つばき）”。
「頑張れよ！柊はっ？」
「椿（そいつ）がやるんだろ？」
「お前なぁ？」
「わーったよ。炎（Fire）」
下にいた、数千の敵兵に火がつく。
「転送（Transfer）」
彼の魔法で敵兵が上空に転移する。
あまりにも高すぎて待っているのは当然生命の終わりのみだ。
彼は一瞬にして敵軍を壊滅させた。
「ばけものめっ！」
「何とでも言え。俺が命を奪ったんじゃない。俺は原因なんだよ。
直接手を下したのは…重力とでも言っておこうか」
「よくやった」
王は彼を誉めた。
しかし彼の魔力は欠片ほども減っていない。

その頃、帝国では。
「千里視（Watch）。
……ほぼ全滅です」
「弱小国相手に何をやっている！！」
「それがぁ…」
「それが？」
「敵軍には”柊”なる人物がいまして、」
「それがどうした」

「魔道士なのです！」
「！！―なら、榎（えのき）を派遣しろ！」
「最強の戦士、エノキをですか！！」
「そうだ」
「通信（Communate）！榎様。王から戦争参加命令が！」
「了解した」
榎と呼ばれた男はそれだけ言って、城を出た。

Ｓｔｅｐ：２（後書き）

ミス等はコメントなどでお知らせください。
お願いします。

Step：3

王国では…
「ん？敵の気配が５００ｋｍ先辺りから、それも強大な。行ってくる」
とか言って彼は勝手に城を飛び出した。
「あれか」
彼は走った。５００ｋｍを２秒で。結論：とても速い。
「ようっ！あんたの名は？」
「榎だ。というか自分から名乗れよ」
「柊だよ。早速始めるよ！最後の審判（Judgement）」
オレンジ色の大小様々な魔法陣が大量に発生する。
そして１つ１つから空に向かって光線が発射される。
「なにぃっ！」
かろうじて榎は攻撃をかわした。
「魔法も使えないのに俺に勝つことはできねーよ」
「出来るさ！」
「無理だな。強風（Gale）」
榎が風に押されていく。
「とどめだ。爆発（Explosion）」
榎は吹き飛んでいった。
（そういえば”えのき”ってキノコみたいだな）
「瞬間移動（Teleport）」

王国の城にて。
ぶんっ　と音がして彼は転移した。
「戻りました。退治しておきましたよ」
「倒したのか？」
「いいえ。追っ払いました。」

「それまた何故だ」
「こちらで雇えば、兵力を強化できますよ？」
「そうか。分かった。
そして、帝国への内部潜入（スパイ）を頼みたい」
「何を求めてるんですか？」
「まあ、帝国全体の状況てとこだな」
「余裕だよ。透明化（Invisible）、瞬間移動（teleport）」
（かしこまれよ！）
と兵士はつっこんでいた。

そして敵城に超簡単に潜入した柊。
しかし…
「来たか、柊」
気付かれている。
「うおりゃあああああっ！！！！」
本人は欠片も気にしていないが…
しかもジャンプで宙に浮いて、ガラスを割って、”王の間”の位置づけの部屋に入った。
そして透明化を解く。
「よお。帝国の国王か」
「貴様とは決着をつけたいと思っていた」
…戦いの予感？

Ｓｔｅｐ：３（後書き）

ちょっと長めな気もしますが（７００文字で言う言葉じゃない）。
あとがきのネタが無い！

Step：4

しかし、起きなかった。
「俺が手を下すまでもない。いけ、大天使（ミカエル）1号よ」
帝国の国王（以下、帝王）に酷似した生命体が姿を現す。
「そんなに良い名前を付けてんじゃねーよ、
吹き飛ばせ！！暴風（Storm）！」
しかし、力も帝王と同じらしく効いた様子は無い。
「仕方がない…最後の審判（The Judgement）！！！！」
と思いきや、全然そんなことはなかった。
あっけなく塵と化した。
「魔法が使えるからって調子に乗ってんじゃねーぞ」
帝王は手を振り上げ、こう言った。
「俺だって使えるのさ。落下（Fall）」
「え――――」
彼は外へ転移し、落ちていった。
その場にいた幾人かの兵士は少し驚いていた。
「失礼ですが、帝王様は魔法が使えたのですか」
「おいおい、上から目線で、妙な敬語な気もするが、俺は魔導士ではない。
魔剣士だ。」
「何が違うのですか？」
「魔導士は魔法主体で戦う戦士だ。
魔剣士は剣術を主体にしつつ魔法で補助をする戦士だ。
一文字しか違わないが、大きく戦術が違うんだ。
だが、俺は奴には負けない」
（帝王様！！）
そして兵士たちの帝王への好感度がかなり上がった。

Ｓｔｅｐ：４（後書き）

更新遅くてすいません。執筆や投稿ができる環境にいなかったので遅くなりました。
また、これからは平日の更新はかなり減ると思います。（今までも少なかったですが）

Step：5

王国にて。
「全然出来てないじゃん」
「でも、収穫ありましたよ王様」
「何だ？」
「帝王も魔法使います。習得度からして、”魔剣士”ってとこですかね。
本陣に登場すると厄介ですよ？剣術も使ってくるし」
「まずいな――」
「敵です！攻めてきましたっ！！」
「また唐突だなぁ…じゃ、行って来ますわ」
返答の間も無く彼は飛び出した。

戦場にて！
「竜巻（Tornado），加速（Faster），加速（Faster），加速！！！！！！！！！！」
強化魔法によって異常なまでに加速された竜巻が敵だけを正確に吹き飛ばす。
…が、
「聖域（Sanctuary）――――！！！！！！！！！」
そこには帝王の姿が。そして帝王も必死に彼を妨害する。
「だが、剣を持たないお前に勝機は無いぃっ！！！！！！！！
創造（Create），加速（Faster）！！」
剣を作り、速度を上げて、帝王を襲う。
「なっ！！」
帝王はすれすれで斬撃をかわした。
「やってほしいならやってやるよ。
魔剣ラグナロク！！！！！」
「ありがちだなぁ…。」

そう言うと、地面から剣を取り出す。
「剣も使えるのか」
そして帝王が斬りかかった。

Step：6

「騙(フェイク)しだよ…てか気付け。
吹雪(Blizzard)い」
辺りの気候が一変し、雪が降り、風が強くなってくる。
「魔弾(Shell)、、、。」
魔力を収縮した弾丸が帝王を襲い――――、
左足を貫通した。しかし某液体は噴き出ない。
「念のためと思っていたのだが発動が早いな」
「自動回復かっ！？」
「その通り。傷によるダメージを無効化し回復する魔法だ。」
「ちぃっ。炎(Fire)」
「雪とはギャップがあるぜ、―よっ―あぶねえなあ」
「……魔剣士うぜえええええええ
黒炎(Black Fire)！！！」
「これが消えない炎か。当たらなかったら意味ないだろ」
「うぜえええええええええええええ
竜巻(Tornado)――――」
「効かないって―馬鹿なぁぁぁぁぁっ！！！！！」
「――――フェイクだよぉっ！！！！！！！！！！召喚(Summon)！！！！！」
龍を召喚し、焼き払う。
「やるな」
「！！！　倒したのに！！」
「俺は3つ命を持っているからな。残念だったな」

帝国の城にて
「まさか命を1つ失くすとはな…」
「椡(くぬぎ)、お前ほどの魔剣士が敗れるとは」
「栩(くぬぎ)か。お前ら手伝ってくれ」

「おし、行くか」

Step：7

「盗聴(Hear)…、帝王レベルの敵が複数体いますね。
たぶん、気付かれてますけど」

帝国にて
「盗聴か――。まあ俺たちが片付けてやるよ。
行こうぜ、椪(くぬぎ)、櫟(くぬぎ)、櫪(くぬぎ)」

王国にて
いきなり現れた敵達。
「ここぉぉっ！！！？」
彼が大声でそういうと…
王様以外が全員、国のすぐそばにあるの草原に移動した。
「やるか…」
そう言って彼は足元の草をむしり取る。
「固化(Harder)」
草が石のように固まる。
「最速化(Fastest)」
そして投げた。
銃弾より速い速度で、椪を貫く。
「もう、面倒だ――――」
「――――やってやる(Start)」
「戦闘開始」
雰囲気が変わった。明らかに先程よりも強くなっている。
「火炎(Blaze)」
巨大な炎が敵を包む…
「「「ぐあああああ」」」
「巨大な爆発(Big Explosion)！！！」

あっけなく敵を倒した。
「なんだよ、この展開……」

王国にて
「よくやった」
「どーも」
「死刑だ」
「……」
「明日ね」
「ええっ！！？」

次の日
どすっ。
大剣が彼の頭を（残酷な描写です）した。
そして彼は絶命した――――

Ｓｔｅｐ：７（後書き）

この小説では主人公を９割くらい”彼”と呼んでいますね。
では問題！主人公の名前は何でしょう。

Step: 8

はずもなく。
「蘇生（Resuscitate）」
彼は彼自身の頭を（残酷な表現です）した。
「バァ…馬鹿なぁ！！！！」
「俺は魔導士だぜ？　あんた、王じゃねえよな？」
「仕組んだのかぁっ！！！！」
「よぼよぼのくせによくしゃべるなあ…
頭が飛ぼうが、魔力があれば死なないさ。
創造（Create）」
剣を作り、構える。
構えは綺麗ではないが、強い意志が彼にはある――
「やってしまええぇっ！！！！！」
悪役にはお馴染みの台詞を吐き、自らは逃げる。
「無理さ、俺には勝てない」
彼は初級魔法を放った。
そしてそれは何百もの兵士を倒す。
命は奪わない。
「お…王様の命令だ、お…お前を、と、通すわけにはいかない、いかない
！！」
椿が立ちふさがる。
「恐怖は恥じるもんじゃねえよ。だがな、
奴は王じゃない。どけ！！」
「駄目です…」
「どけよっ！！！！！！！！！！！！！！」
「駄目だぁっ！！」
椿が剣を振るう。
しかし、透過魔法により彼には通用しない。

「気絶(Faint)」
椿は魔法の通り気絶した。
「瞬間移動(Teleport)」

建物同士の間の狭い道にて
「逃げても無駄だぜ？」
「くぅっ…何て言うと思うかぁ？」
「（言ってんじゃん。）まさか…」

Step：9

「俺は世界最強の魔剣士、柳(やなぎ)だ。」
柳が老人の姿から、青年の姿に変化した。
「面白い！じゃあこれを破ってみろ！！
停止(Stop)」
（動かないっ！！！！だが、、、）
ぼんっ　と爆発した。
爆弾が。
柳によって。
それは、”停止”の直前に仕掛けられた時限爆弾。
そして柳は死んで、そして生き返る。
「おいおい、命は大切にしろよ？
俺が言うのも…変だがなっ！！――みせてやる、俺の真の力をっ！！！！！！」
彼の眼の色が変わる。
「真の魔導士の力をっっ！！！！！！！！！
炎(Fire)」
通常の彼の力では出す事の出来ないような山一つ飲み込めるほどの大きさの炎が柳を襲う。
しかし――――
「最強化(Stronges)，水(Water)」
ぎりぎりで攻撃を防ぎ、剣で彼を襲う。
だが、軽々とかわし、
「終わりだ、柳さん…」
彼は肘打ちを放った。
無詠唱での強化魔法で強化されたそれは柳に直撃し、軽く１０ｍは飛んだ。
「ううぅっ」

柳は気絶した。
「て、展開が単調すぎんだよ…」

帝国にて
「俺が目覚めるときが来た！！！！」
誰かが目覚めた。

王国の城地下にて
「よっこらせ」
彼は本物の王様を見つけ、助けた。
帝国で目覚めた”誰か”が勝負を仕掛けてくるのも知らずに、陽気に。

Ｓｔｅｐ：９（後書き）

毎回ですが、話の構成が適当すぎる…

行き当たりばったりを止めようと何回決意したか分からない

作者はうなだれていた。

Step: 10

王国前のよく使われる草原にて
「やあ、ひいらごぃ」
「何だよ。誰だよ。”ひいらごぃ”じゃねえよ」
「滑舌がっ…」
ちなみに”滑舌”が一発で変換出来なかったのはここだけの秘密です。
「消えろ、爆発(Explosion)」
「炎(fIrE)」
紫の炎が飛び出た。
「聞いた事も無い魔法だっ！！！　何者だ、貴様ぁ！」
「俺は2900000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000年間ずっと眠ってた、伝説の魔王さ。もう帰るわ、じゃあねぇ〜」
「待てやこらあああああああ！！！　長すぎなんだよおおおおおっ！！！！！！０が幾つあると思ってんだよ！！！！」
「え？多分58個」
「冷静に返してんじゃねえよおおおおおお！！！！昔過ぎだ！」
「文明あったのかぁ？」
「何でお前が知らないんだよっ！！！！　偽物か？」
「炎(fIrE)」
「聞けっ！！」
”つっこみぱわー”で魔法を相殺して、彼は王手をかける。
「魔王だってな」
「ああ」

王手じゃねえええええ！！！
台本読めっ！
「台本？ないじゃん」
痛いところを突かれた作者。
が、”泣きっ面に蜂”にはならず、
「独り言きもっ！」
彼へと照準（しょうじゅん）は向けられた。
「飛べっ！少年よ！！」
「はぁ？」
これが柊のこの世界に残した最後の言葉になった。

Ｓｔｅｐ：１０（後書き）

あとがき質問コーナー（ごめん嘘）

Ｑ：話が理解できないです
Ａ：もーしわけない！文章力がないので

Ｑ：違うし。話が理解できないの！
Ａ：勢いで、つい。

Ｑ：じゃあ投稿すんな
Ａ：いや、その…、ねえ。

Ｑ：消えろ
Ａ：質問じゃねええ！

以上あとがきでした。

Step;11

「そんな…」
彼がついた世界は学園だった。
※魔法は使えます。
「へぇ。炎！(Fire)　…あれ？」
※ただし一つだけ。
「使えねえええっ！」
こうして柊の学園生活が始まる！かもしれない。

クラスにて
「よぉ、柊」
「……誰？」
「俺は杉(すぎ)だ。」
「……誰？」
「どおした」
「……何があった」
「つっこまないのかあ！」
「……まさかっ！！」
そのまさか、学園モノですよぉ。
「……うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああ」
がらっ。と戸を開けて入ってきたのは先生だった。
「朝の学活始めるぞ～」
時間がたち…
「終わり～。柊は後で職員室へ来いよ～」
「……ああ、終わったあああああ…」

「大丈夫か、変だぞ柊」
授業も終わり――
「お邪魔しま～す」
「おお、柊。話がある」

指導室にて
「こんな部屋あったんだなあ」
言ったのは先生。
「……ちょ…えっ…」
「柊、いったん落ち着け。
ここは学園。それは分かるはずだ。お前の目的は…」
「なんですかっ！！！！」
「なんだろね～？」
「……。Ｂｒｅａｋ。」
後ろの花瓶を粉々に砕いたが、先生は無視して話をした。
「Ｃｒｅａｔｅ。無駄だね。ちなみに、この世界で一番最初に使った魔法が基本的には習得される。」
「じゃあ俺の魔法はＢｒｅａｋか。」
「じゃ、かいさ～ん！」
「あざっす」
何のオチも伏線も無いこの話に嫌気がさす柊だった。

Ｓｔｅｐ；１１（後書き）

疑問への回答！！

１．冒頭ですでに魔法を使っているので、柊の魔法はＦｉｒｅではないのですか　…魔法の形態（や使い方）が違うからです。

２．学園物は他でやれよ　…すいません。

３．タイトルが：（コロン）ではなく；（セミコロン）になっています。　…ミスではありません。学園編（”編”でもありませんが）になったからです。

Step;12

「誰？」
彼の前には担任の姿が。
「担任だっ！！時空操作魔法を使う俺をなめるなぁ！！」
勢い余って魔法が発動し、彼は…
「ここは見慣れた、、」
そう、元の世界へ戻ってきた。
「てなんじゃこりゃあああああああああ！
早過ぎだろ常識的に考えてっ！」
知りません、そんな事情。
「…ばかな！たしかにきいたはずなのに」
２９０００（省略）年前の魔王が驚く。
（転送からほとんど時間が経過していないのか。というか何故平仮名？）
彼は学習した。
「俺は生まれ変わっ――――」
大きな声で彼はそう言って、
「てません」
小さな声でそう言った。
「聞こえてるわっ！！！！」
「よっ」
牽制目的のはずの正拳突きが、魔王に穴をあける程の威力の攻撃と化していた。
”程の”が重要。
「じゃあ、終わりだ」
蹴りで終了した。
王国にて

「王様」
「なんだ？」
「どけ、今日から俺がここの王だっ！！！！」
「なにをいいだす」
「だから、平仮名うぜえええええ！
どかなければ、斬る！」
「はい」
「えっ！？あっさりぃ？」
台詞多すぎだ、お前ら。
こうして彼は王となった。
しかし彼の前に史上最大級（ここ、”級”が重要）の試練が襲いかかる！

Ｓｔｅｐ；１２（後書き）

更新ペースが明らかに落ちている、やる気のない作者です。（ダメじゃん）

その場その場で話を考えているので辻褄が合わなかったりしたら、お知らせください。

Step：13

「王になってはいけません」
聞いた覚えがない声がしたと思ったら王女だった。
「何故なんだ」
「だってあなたが戦わなければ、ここの雑魚兵士どもは役に立ちませんもの」
（さらっととんでもないこと言ってるな、この王女……。）
「分かったよ。魔王軍潰してくる」
そう言って彼は城を後にした。

＄

「ははぁ。お前、あっちのちっさな国の魔導士だな？」
俺は敵国の多数の兵に囲まれていた。無駄に広い草原の中、逃げられるはずもなく。逃げる必要もなく。
「五月蝿い。散れ。”爆発”」
俺のみを除き周囲は爆発を起こした。
「何だよあいつ…、化け物かっ！？」
「少しは黙っとけ。”沈黙”」
（声が、出ないっ）
「”意識奪取”、”転送”」
これは国にやろう。もっと強い奴はいないのか？
「居るさ、此処に」
何時の間にか、宇宙服に似たものを着た誰かがいた。
（こいつは明らかに雰囲気が違う。強い！　他の雑魚共と比べ物にならないレベルに！）
「済まない、名乗るのを忘れていたね。私は帝国軍第六艦隊隊長、桜だ。」

「帝国？」
「ああ。俺たちは今までに４０万以上の星を潰して来た。お前ら、俺たちの下につかないか？今ついたら助けてやるよ？」
「断る。」
「今までの星々にもたくさんいたよ、断る奴。でも、潰すのは容易だった。」
桜の口調が急に重く、強く変わった。
「まあ良い。いずれ潰すのだから。それとも、今戦いますか？」
「なめやがって。なら今いくぞ、”炎の吐息”ッ！」
「効かぬ。通常の肉体を超越した我の前にはその程度の攻撃など塵に同じ！」
しかも、桜は魔法無しで攻撃してくる。俺の推測では魔法を使うことなど、容易（たやす）いはずなのに。
「今の君相手に魔法など必要ありませんよ」
「何だと糞が！！”崩壊”」
「馬鹿な！このレベルの魔法をたった一人で唱えるなど無謀の極みっ！！
魔力が暴走するぞ！？」
「しないさ。何故なら俺は、この世界で最強の魔導士だからだ！！」
？
「あれあれ？桜兄ちゃんあんな雑魚に時間かかってるね！僕が行こうか？」
「いや、その必要はない。苦戦してはいない。弄（もてあそ）んでいるだけだ。」
「ふうん。そうだと良いけど？」
宇宙船の中で二人はそんな会話を交わしていた。
？

「最強？　ははっ！こんな大ほら吹き初めて見たよ。この私に勝てない君が最強…？」
「ああ。なら勝ってやるよ。もう既に？？」
「！？　まさかっ！！」
「？？崩壊は始まっているんだからな」
辺りが、割れ、砕け、消えていく。闇だけが残る。
桜は落ちて行った。下には巨大な魔物がいて、大きく赤い目を見開き、獲物を待っている。
「？　あり得ない。もしかすると、これは？？」
落ちているというのに桜は冷静に判断し、結論を下した。
「？？いや絶対、幻覚だ。」
「だが解けることの無い幻覚。つまり、」
俺は残酷な笑みを浮かべ、言った。
「現実だよ」と。

£

「敗れましたね、桜。」
「まあ、生きて帰ってはくるだろうよ」
宇宙船にいたのは、子供と執事？？に見える人間だった。

£

そして、宇宙船は、とある小さな国？その星でたった一人の魔導士のいる国？のそばに着陸した。
「あれれ？君が柊だね？僕は第一艦隊隊長、樫（かし）だ。」
「無防備なんだよ！！」
俺はいきなり攻撃した。
だが油断していた。第一艦隊の隊長、つまり最強なんだよな。しかし気づくのがあまりにも遅すぎた。

「あーあっ！身の程知らずなお兄さん♪」
手の一振りで、俺はどこまでも遠くへ飛ばされて行った。
「思ったよりも弱かったよ？」
「そうですか」

＄

「ふふふ…、はははははっ！くそったれ！ムカつくぜ！次こそはやってやるぜ！」
その日の俺は何故かテンションが高かった。

～次の日～
城の中で寝ている俺の部屋のドアを朝４時に吹っ飛ばした奴１名。
本当なら即刻絞首するところをグッと抑えて、引きつった笑みで、
「こんな時間から何の御用で？」
と言った俺。
「いや、目が覚めたし来てみただけ」
と奴は言った。
ついでに、「何その顔きもっ」と付け足して。
俺はどこまでも奴を葬りたかったが、
「うは。消えろ馬鹿がッ！”波動”」
あいつは吹っ飛んで倒れた。気絶していたが無視する。
「くそ。目が覚めてもう寝れないじゃねえか。暇つぶしに外に出てみるか」

～外～
「馬鹿な！！何だよこれ」
月が赤く染まり、軍艦が数えきれないくらいに空に散らばり、ここを狙っていた。

£

「ここを潰せば後は簡単！これで終わりだよ、柊君♪」
「樫。そんなに急ぐことも無いだろうに」
「いや、あいつ、不意打ちだったから本気を出してしまったものの、めちゃめちゃ強いぜ？」
「あなた様がそこまで言うとは……。油断は出来ませんね。」
「じゃあ、始めようか」

Step：14

俺は拡声魔法も使わずに、大声で叫んだ
「お前ら、其処で何やってる？　この俺が許すとでも思ってんのか！？」
「黙れ、屑が。やれ。波動泡だ。」
「は、波動泡！？」
どんな攻撃だよ？　見当もつかない。
「波動泡、発射！！」
半透明な大量の球体が出現し、俺に向かってくる。
「”絶壁”！」
しかし、波動泡が触れたところから色落ちして一瞬で壁は崩れた。
「魔力を奪うのか！！　一撃だ。一撃終わらせてやるよ！
”超新星爆発（スーパーノヴァエクスプロージョン）”！！！！！！！」
爆発が連鎖し、軍艦ははじめの2割程度しか残っていない。
（今だ、城を狙え。）
突然、城に向けて光線が発射された。
だが、そう簡単には攻撃させない。
「何っ！　卑怯だぞ！　”疾風”」
俺の周りを風が巡る。
「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
バコっと根元から砲口を叩き割った。
”疾風”で速度を上げた手刀は俺自身が思っている以上に強化されていた
「うわぁぁぁっ！！」
が痛みも同レベルに、いやそれ以上に強くなっていた。
＄

「何だあいつは化け物か！？」
樫のいる第一艦隊の中にどよめきが走る。
「黙れ。」
ざわざわ。
「黙れェ！！」？？
どよめくのも当然、奴、柊は手刀のみで全ての軍艦の砲口を破壊した。
「俺が行くしか？？」
「いや、樫にそんな負担をかけるわけにはいかない。城に眠る奴を、」
（話すな。ここには幹部以下の奴らがわんさかいる。聞かれると面倒だ）
「まあ、とりあえず柊は俺がやるよ。お前は城を」
そして、樫はさらなるどよめきを生んだ。
「？？そして、他の奴は全員、例外なしに帰れ！！」

＄

俺の前に、誰かが降りてきた。
「俺は第二艦隊隊長だ。もう名乗る必要もないだろ？」
「名乗りもしないなど俺も随分舐められたもんだな」
「黙れ。行くぞっ！」
（こいつ、弱い。こんな奴を差し向けるなど、樫もふざけているッ）
「”電光石火”」
出来れば早いうちにケリをつけたいが…

？

「”電光石火”」

柊とやらはそう言った。
その直後、急速に加速し
次の瞬間、右脇腹をざっくり切られた。
痛むというよりもむしろ熱い。
そして、意識が遠のく。

?

（”意識朦朧”）
効果はあるようだ。奴は少しぼーっとしている。
当然隙は与えない。ここで、終わらせる！！
（”刃研ぎ”）
剣が鋭さを増す。

特に言う事はない。
振った、ただそれだけだ。
そして奴は崩れ落ちた。
俺も鬼ではないから半殺しってところだが。

£

樫は王の間にいた。
「あはは。急ぎ過ぎたようだね。皆さんお揃いだ。逃げ遅れた？」
「失せろ餓鬼が」
国王は言った。そして、
「ぐふ…」
逝った。
「あーあ。死んじゃった。」
「ぐっ！　貴様っ！」

その時だった。
「俺がやります」
椿。
「君、椿か。」
「だから、、、、、何だぁっ！！！！」
十分に溜めていたこともあり、その一撃は樫を壁に叩きつけた。
「面白い！　”疾風”」
あっという間に距離を詰め、樫は椿の腹を殴った。
「あぐっ」
椿が倒れこむ。すかさず樫が背中を蹴り、いや蹴る直前に
「たのもぉぉぉぉぉぅぅう」
空気の読めない奴、柊が入ってきた。
「「「「空気読め」」」」
しかし、柊はスルースキルを発動し、
「まだてめえとの勝負は終わってねえぞ」
「いや僕が倒したから。”分身”」
「うぉぉ！」
柊は気迫だけで分身を消した。
「自分で来い！！」
「そうさせてもらうよ。」
（あれは魔剣ラグナロクっ！！　下手な剣で攻撃すると魔力差で腕くらい簡単に折れる！）
騎士の一人は驚いていたが
「ラグナロクか。ちなみに俺の剣は柏餅っていうんだ。今さっき作ったものだが。
勿論意味は、お前を倒して食べると。」
柊は余裕そうに言った。
（！？　何故食べる？　しかも漢字違うし）
「漢字違うことくらい知ってるわ！！」
（いや絶対知らなかったなコイツ！）

「ほいっ」
樫の一撃で柊が吹き飛んだ。
「さすが強い。だが？？」
「だが？」
「もう、準備運動（ウォーミングアップ）は終えたようだ。」

£

俺は力を込めた。
魔力が柏餅に集まるのを感じる。
「くくく。これならいける？？」
「おいおい、その笑い方じゃお前が悪役じゃねえかよ。それともあたしに勝たせてくれるのか？」
「あ、あたし！？」
「黙れ、黙れ黙れぇーーーーーーーー！！　”衝撃波”」
「いや、そんなの効かないんですけど。舐めてんの？」
「うるせぇーーーー！！　”服従”」
「なっ！　動けねぇ！」
（てあれ？　命令して来ない…）
「あわ！　あわわわ」
（完全に混乱してんじゃねえか！！）
俺はぐいっと力をいれた。
いとも簡単に服従は解けた。
「じゃ、本番といくかぁ」

Step：15

「来いよ」
俺の挑発に奴は乗らない。
「うらあっ！」
？？と思ったが、あっさり乗っている奴がいた。
「馬鹿だろ、お前。」
「なっ！！　しまったぁ！」
俺は剣を振り上げる。狙いを定め、魔力を込める。
最大まで鋭さを増した剣で樫を斬った？？？？
はずだった。しかし実際は。
「大丈夫ですか、嬢様？」
「そう呼ぶなっつったろ？」
「はっはっは。物忘れが激しいもので。もう私も老人ですからね」
そんな訳はない。しらはどりで剣を受け止めているこいつからは尋常じゃない量の魔力が、？それでも全体のごく一部？が、流れている。
「で、柊さん。どうなるか分かっていますよね？」
「俺がお前を倒すんだろ？」
「分かってらっしゃいませんね。我が力を？？」
十分に、いや十分すぎるほど分かってるさ。
でもな？それを超える力を俺が持っているとしたら？
がん。剣がぶつかる。
刃に魔力を纏わせているせいで、剣身同士の間には微かな隙間がある。
「一回」
執事はそう言った。
「は？　って、ぐっ？？」
力が何倍にも増している。

こんな事してたら、城なんか崩れるぞ？
「あぁ、そうだった。おまえ、アレが目覚めたぜ？」
「くっ、厄介な奴どもが。だが？？」
執事は剣を大きく振った。俺は、外に投げ出された。

&

「ぬう。この体、何年ぶりだろうか？」
椿は言った。
「貴様、勇者か？　はっ。俺すらも倒せなかった哀れな役立たずが」
「何だと？　なら見せてやる！　”竜の剣”」
椿は緑色の剣を取り出す。
そして、迫る。剣の軌道が緑の線となって残る。
がん。圧倒的な力の差によって執事が押された。
（強いっ！　これほどの力を何処で得たのだ！？）
ブンと明らかに音となって聞こえたその時には、椿は背後に回り込み、
「遅いぜ？」
真っ二つに切り裂いた。
「…　悔いはない。唯一つ、彼奴（あいつ）との決着をつけられなかった以外はな。」
それだけを言い残して執事は生き絶えた。
「……柊」

&

スローモーションでも見ているかのように時間が減速していく。
ずっと目を開けていると酔いそうだ。
時間がピタッと止まった直後。
時間は急加速し、俺に不意打ちを与えた。

「痛えっ　”治癒”」
頭の傷が急速に収まっていった。
だが、彼が次に見たものは、頭上を巡る、たくさんの星々だった。
&
飛び降りた。
「ばがだろ、でめえっ！」
次に僕が見たものは血まみれになった、柊の顔だった。
「なにじやがるんだ！？」
「落ち着け。」
「悪いのばづばぎだろーが」
「”治癒”」
「次やったらぶっ潰すぞ」
「はいはい♪」
（こいつといると、何か楽しい。）
&
「はいはい♪」
俺はそこで違和感を感じた。
「”幻影よ解けろ”」
「何ぃっ！？　何故ばれた！」
俺の前にいたのは、椿じゃなく、王女だった。
（こいつ、案外強い）
「っ！　何か来るぞっ！！」
上から様子のおかしい椿と樫が降りてきた。
「2対1は不利だ。王女、共闘できるか？」
「ヒャーハー！　あたいにかかればこんな奴らすぐに倒せるぜ。お前こそ足引っぱんなよ？　柊」

キャラ違うぞ、お前は誰だ。
「さあ、行くぜっ！」

Ｓｔｅｐ：１５（後書き）

後から見直すと後半ぐちゃぐちゃになってますね……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1069s/

ただ一人の最強魔導士

2011年8月23日03時54分発行